

日本医家芸術クラブ主催 「東日本大震災」チャリティー・イベント



3月11日の「東日本大震災」で、日本医学士会総会ソシアルイベントが中止になりました。これを受けて日本医家芸術クラブでは4月3日、被災地へ支援のチャリティーコンサートとして実施、国際フォーラムで予定した合同美術展も、当地のシラヤ・アーツスペースに移して行いました。義援金は30万4291円、ご協力感謝します。以下はその開催奮戦記。

美術 写真 書道合同展も

私達は被災地の復興を応援します

↑ 黙祷をもつて
始まりました

美術部長 白矢 勝一



→ 開会挨拶する初芝
澄雄・実行委員長

ソシアルイベントに日本医家芸術クラブは以前にも俳句部が参加した経験がある。1953年の創立時は事務所が日本医師会館内におかれ、昭和57年、これまで機関紙発行所としても記録されている。つまりこのクラブは日本医師会がつくったといっても過言ではない。こういう歴史的な背景もあり、今回のイベントを必ずや成功さ

せようと私や津谷喜一郎先生、飯塚崇志先生が何度もお茶の水にある東京都医師会館会議室に集まり医師会幹部および職員、他のソーシャルイベント参加者(囲碁、マラソン、卓球等々)と話しあった。そして医家芸術クラブの美術、写真、書道展は銀座の国際フォーラムでも最高にいい場所で行われる予定となった。そして医家芸術クラブの美術、写真、書道展は銀座の国際フォーラムでも最高にいい場所で行われる予定となった。

その準備のために会員の大切な作品をお預かりし、また医学会総会登録費も集めさせていただいた。ところが3月11日金曜日、大震災が東北を襲い日本人すべてを打ちのめしてしまった。この運命の日、私は代診の先生に診療を任せ、油絵を描いていた。今から思えばそういう日常のことが不謹慎と感してしまう。すぐにスタッフに命じ患者さんを安全な場所、外部へと誘導してもらった。普通でない揺れのためか、身体はいつまでも揺

れているようであった。余震はあるもの落ち着いたと思いい、代診の先生も診療を続けてもらっていた。

その時は医家芸術クラブの事務室にあるラジオのみが情報源であった。ラジオを聞くうちにこの地震がとんでもない大地震であることがわかってきた。テレビを取り出したのが6時ごろであったと思う。西武新宿線がストップしているという情報が入ってくる。代診の先生もスタッフも駅まで確かめに行く。近くに住むスタッフは帰れたが電車で通勤するスタッフ達は家族の迎えの車が夜遅くたどりで愕然として座っていた。日本が潰れてしまうかもしれない、その日私と代診の先生は診療所に泊まることになった。毛布やタオルをかき集めて暖をとった。電車が動き始めたのは夜遅くなつてから。しかしこの大きさは日をましてわかってきた。予定停電なるものは今までの日常を変えてしまう。震災にあった

人々のことを思えばこの程度のことではない。私が子供のころは停電など日常茶飯事であった、また停電のたびにロウソクで影絵遊びをしてくれた祖父を思い出させた。

震災にあつた方々のご苦労やつらい思いに対して、また日本のために義援金を出す人々が現れた。私も結局お金を出すこと以外に何もできない。今までの生活は一体なんだつたのだろう。テレビを見るたびに辛くなる。関西出身の私は阪神大地震のときの肉親を心配した思い出がある。多くの人々が命をなくし、家を失っている。それに追い打ちをかけるように寒さが襲う。3月14日月曜日、事務局の木下が福島市の大武省三先生に電話した。先生は無事で「大丈夫、葉がないが診察をしている、電話ありがとう」。「何か必要なものがあつたらお送りますから」と仙台市の桜井實先生に電話。桜井先生は「これが初めて通じた電話です。ありがとう。生き返るようだ」。お互い無

事を確かめる涙の瞬間であった。

日本医学会総会の責任者も中止を決断し、3月15日その旨のメールを送った。「去る3月11日に発生した東北関東大震災で被災された皆様は、心よりお見舞いを申し上げます。お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、ご遺族に心からお悔やみを申し上げます。また、被災地域の一日も早い復興をお祈りいたします。

今回の大震災と原子力発電所の事故、それに引き続き起こっている社会的な混乱は、わが国がこれまで経験したことのない大規模なものです。第28回日本医学会総会は本年4月に開催を予定しておりましたが、この状況を考慮し、大幅に総会のあり方を見直すことといたしました。まず、お集まりいただく講演会と博覧会は中止いたします。しかしながら、主な学術講演・展示につきましては、電子媒体やWEBを活用して、後日、ネット上の日本医学会総会として、発表を予定

させていただきます。存じ上げております。詳細につきましては早急に関係各所と協議・調整の上、1週間以内にご連絡申し上げます。ご講演・展示をお願い申し上げます。先生方には、誠に申し訳ありませんが、ご発表予定の資料等をお借りすることになるかと存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

今回の大災害に際して、医療者・医学者一人ひとりが、被災された方々をいかに支援するか、それぞれの立場で考え、行動する必要があります。医療者・医学者は現場の経験と幅広い視野を持っています。私どもの叡智で、この国家的な難局を乗り越えられるよう願っております。

責任者としてのその決断は、苦労の末のものだったと思われる。集めた会員のお金をどうするか、講演会を中止するか、短い時間の中で寝ずの議論の末のことであつたであろう。日本医師会、東京都医師会には結束してこの医学会総会を日本の

未来のためにと、頑張ってきたのである。これを断念するのに数日かかっている。

四年に一回、大切な医学の歴史を刻む催しであつたからである。会頭 矢崎義雄 副会頭 小川秀興 副会頭 鈴木聰男 準備委員長 永井良三 各先生、忙しい毎日のなか本当にご苦労さまでした。

我々も合同中止のお知らせを会員にお送りした。ところがソシアルイベントの担当者からイベントを行うかどうか電話があつた。この時点で予定していた銀座での懇親会はすでにキャンセルしている。しかし会員の作品は集められている。もともと音楽会は小平で行われることになつていた。それに、すでに先行演習のためのリハーサルと「はぐとまん」(ピアノ萩野仁志 ベース多田文信 ドラム有吉拓)が大震災一日後の13日の日曜日に予定通り行われていたのである。震災の次の日の土曜日の夜、萩野先生にこの際自粛して中止しようかと電話した。しかしもうすでに案内状を出してしまつて

いる。今回はチャリティーでやりましようという事になった。

3月13日、予定通りリハーサルが行われ多くの方が義援金を出してくださいました。私は医師会の事務局にも電話して義援金を出すようにしようと呼びかけた。他国が日本を支援してくれている、日本人の我々が支援しないなど考えられない。私も自身で義援金を送る。医師会も運動を起こそう、そういうふうに医師会長の奥村秀会長に伝えてくれと電話した。他の先生方も同意見だったと思う。3月23日、小平医師会理事会は北多摩医師会が200万送るのに合わせて、同額の200万円送ることに決めた。奥村先生は今回のチャリティーコンサートにも出演してくれ小平医師会は被災された方々が小平に來られた時積極的に支援するという旨の話をしたあと優しい声で英語で歌ってくれた。多くの方が感動したと思う。

4月3日の本番に間に合わせるように書道、写真については事務局の木下と日

頃親しい中沢、平石、三谷さんが、絵画については私と木下が私の知人である画家の藤島さんの指導のもと、彼らとともに数日かけて飾り付けた。大出は目録を作りなどに務めた。自粛ムードの中、改めてこれを実行しようとしたことに反発される方もあるかもしれない。しかしなぜ敢行したのか？

私は町内会の一員でもある。町内会では悲鳴をあげていた。特に飲食店は悲惨であった。町内会で総会が行われ我々が元氣を出さないとだめだという話になった。そんな時、銀座のシャンソニエから電話があった。私の高校の友人がシャンソン歌手として大いに活躍している。その名は広瀬敏郎、シャンソン好きの人ならもしかしてご存じかもしれない。このごろ夜11時になると店を閉める。お客さんは電車が動かなくなることを心配してこない。夜は灯が消え閑散としている。そのため長年歌い続けたシャンソンのお店も、3月31日を持って首になる。そのお店も

カラオケのみを残して数か月で閉店する。東京のど真ん中で景気悪化が始まった。

そんな中で小平医師会大沼班の懇親会が4月2日つまりコンサートの前の日に行われた。この懇親会は大震災前から決まっていた。その日、私は午前診療した。1時ごろに診療を終え絵画の配置を確かめるためにアートスペースに行ったところ、木下が懸命に掃除をしていた。「先生こんなに汚れています」と雑巾を見せてくれた。私も驚くほど汚れがついていた。それは長年気が付かなかった汚れであった。慣れというものには恐ろしいものである。そういうことが積もれば気づかないうちに全てが見えなくなってしまうのだ。6時半からの大沼班の懇親会が始まるまでトイレの隅々まで掃除をした。

このコンサートは日本医家芸術クラブの名譽がかかっている。まだ汚れが気になったが懇親会に直行した。私が前もって事務局に頼んで今回のコンサートでも

歌ってくれた小平医師会の重鎮である山之内先生、澄川先生の都合のいい日を決め、多くの先生方にお誘いをかけていた。遅れると失礼になる。その懇親会は黙とうで始まった。

新たに会員になった開業の先生もいるため自己紹介が始まる。私はその時、日本が元気になるためには今までお世話になったお店に行くべきであると話した。現に我々が集まっていた割烹料理店「清乃」はキャンセルの波に飲込まれていたのである。家賃を払いながらの店なら持ちこたえられないと話す店主。大沼班の世話をしてくださっている若い先生も敢えてこの懇親会を行った。それは前から決められていたことでもあるが、小平のお店を皆で助け合いたいからだとのことであった。

さて4月3日。10時にまず私は萩野先生のピアノでリハーサル。出演される先生方もそれぞれピアノストとともにリハーサル。この時、福島の大武省三先生か

ら電話があった。「もし医学会総会がお金を返すというなら、僕のは義援金の一部にしてほしい」と。また「今回は出席できないが義援金を送りたい、チャリティ



満員盛況の会場（南側） 壁面には美術作品

ーの一部に」と安彦洋一郎先生の電話。その後、青山六弥先生からも金一封。

2時からコンサート、写真家の島田さん、女子医大関係の西村治子さん、画家の吉留さんにしか知り合いに声をかけてほしいと頼まなかった。アートスペース

は100人以上だと窮屈になると思ったし、患者さんから関係者でなくても入れるのかという電話がいくつもあったからである。

2時前から大勢の人々がアートスペースに訪れた。洋楽部と邦楽部に籍を置かれる高橋妙子先生も来られた。椅子が足りない。応援に来てくれた若い人たちに頼んで隣にある私の診療所から次から次へと椅子を運び込む。アートスペースは満員となり熱気に包まれた。そんな中で萩野先生のピアノが静かに流れる。司会も萩野先生。みんなで椅子から立ち黙とう。第28回日本医学会総会ソシアルイベント日本医家芸術クラブ演奏会が始まった。

この会の委員長を務め陣頭指揮をとり我々を見守ってくださった初芝澄雄先生が開催を告げる。萩野先生が初芝先生は日本の胃カメラの先駆者ですと紹介。初芝先生は胃カメラについてアメリカより先に日本で開発が進んだ、胃の写真を撮

るとき前しか撮れない、その後ろ側を撮る方法を考え、特許も取ることもせず、論文を世界に発表されたと話された。この話は多くの観客の心を打った。こんなすばらしい医師が我々日本医家芸術クラブにいらっしやる。私もこのクラブの素晴らしい歴史を誇りに思った。この話をしていたら本当によかった。

これには後日談がある。その論文発表後、ある会社の社長が「俺の胃を調べてくれ」と依頼され、「たいじょうぶですよ、胃潰瘍でした」と結果を報告すると、謝礼ですと封筒を渡された。じゃあ皆で飲みに行こうということになった。ところがその封筒の中に小切手で1000万円が入っていた。その頃、初芝先生の月給は2、3万円だった。驚いて教授に相談し、とても受け取れませんと返しに言った。そしたら俺が死ぬまで寄付すると言ってくれ東京医大の研究施設に寄付を続けてくれた。それは総額3億6千万円にもなった。明星食品の社長さんに感謝。



被災地の香取市から
駆けつけた浅野先生

怪我をおしてイスに腰掛
けて歌われた松木先生



人々の心をうつ音色
高野先生のフルート

会員の絵画や写真に囲まれコンサートが始まった。演奏会第一部の一番は……
高野征夫先生のフルートである。震災について述べられ先生のフルート歴を披露された後美しいピアニスト竹内綾さんに合わせての音色は人々の心を奪った。
ファンタジー フォーレ作曲。外科医として日々忙しい中、子供のころから続けられたというフルート。この開幕を飾るにはふさわしいものであった。

松木耀子先生から「数日前転んでしまい腰を痛めた、この大事な時に申し訳ない」との電話。しかし洋楽部部长としての責任感からか、この日椅子にすわり歌われた。その声は天使のように澄み切っていた。シューベルトのセレナーデ。無理を押しでの出演に感動してか、会場は大きな拍手でわれんばかりであった。

浅野尚先生は千葉の香取市から朝早くかけつけてくれた。香取市は震災を受け苦しい、そこに予定停電、それはないだろうと千葉県知事の森田健作がかけあつ

て停電はなくなり、なんとか暮らせている。震災地からわざわざ来られた先生に全ての人が心を打たれた。その歌は「白日」三木露風 作詞 本居長世 作曲 「照る月の 影みちてかりがねの さおも見えずよわが思う はても知らずよ ただ白し 秋の月夜は 吹く風の音さえて 秋草の 虫がすだくぞ 何やらん 心も泣くぞ 泣きあかせ 秋の月夜は」後で友人が「僕あの歌大好きなんですよ。よかったあ」震災地から駆けつけてくれた浅野尚先生に大拍手。

加茂和子先生（ピアノ伴奏 室谷章）

はカッチーニのアヴェマリア。Ave

Maria は、「マリアに幸あれ」を意味するラテン語で、転じて、この一文に始まるカトリック教会の聖母マリアへの祈祷（天使祝詞）を指すそうだ。イエスを生んだ母親に幸あれ！ 身体全体を震わせての歌唱力に会場は大きな拍手で揺れるよう。去年からクラブに復帰され活躍されている。



← 息の合った女声コーラス4人組

↑幸あれと祈りをこめて加茂先生



← 手の表情も細やかに木下優奈さんの舞踊「アリラン」



ノ伴奏 刑部美也子）によるエーデルワイス、野ばら。会場の人々はその親しみのある歌声に身体を左右に曲に合わせていた。コーラスはソプラノ、メゾソプラノなどの組み合わせ、呼吸びったり、真剣に歌われる真摯な姿に観客も静かに聞き入っていました。

一部の最後に木下優奈さん。萩野先生のピアノに合わせてアリランを踊る。ア

リランは「美しいあなた」という意味だが、そうだが、美しいあなたという意味以外に「離れたくないのに離れねばならぬ故郷、別れたくないのに別れねばならぬ恋人。アリラン峠を越える、この越えると

小川昭子 砂井馨 廣瀬珠恵 松木耀
子さんから4人による女声コーラス（ピアノ

いう言葉は大変な困難に立ち向かうという意味も含んでいます。今の日本は大変

なことになっています。この困難に立ち向かっている人々のために心を込めて踊ります」このすばらしいダンス、手の表情、すべての観客が魅了された。

この後休憩、少々アルコールが入る。2部の始まり。

ここで我が日本医家芸術クラブの太田



委員長が挨拶Ⅱ写真⑤
東日本大震災について
哀悼の意を述べられ、

「本来銀座の国際フォーラムで開かれるはずであったが、この小平の地で開くことができてよかった」——これには、小平の住民は感激し大きな拍手。その後美術部を代表して私と鈴木啓之先生が自分たちの絵を紹介。鈴木先生の黒は会場で光っていた。写真部の部長、竹腰昌明先生、大武秋笙先生、岩瀬光先生がそれぞ

れご自分の写真について説明。その写真は各自最高の出品作である。このソシアリティイベントには優秀な作品には会頭賞や都医師会賞などの賞状が与えられる。こ

美術部 鈴木先生



写真部 竹腰先生④と
岩瀬④、大武先生④

れは個人の画歴などにもなり名誉あるものである。

このコンサート後の数日も多くの人々が訪れた。総合展を見て、これは本当にお医者さんの作品かと驚く声しきりであった。伝え聞いた多くの人々が来られるので会期を土曜日まで伸ばすことになっ

た。

ここでこの会に今年新しく出品された絵画を紹介。

小林信や先生 長野市 重症心身障害の医療に取り組んでいる。作品は「足組

む赤ん坊」

まず大きな

足と顔が目

飛び込んでく

る。愛情に包

まれているの

だろーのびの

びしている。



バックは主体を効果的に引き立てている。ユーモラスな絵である。

野口眞利先生 練馬区 内科 「絵描

きのいる風景」セザンヌの画風に自己独

特の厚描きを加え見る人に安心感を与え

ている。経験の豊富さが見て取れる。

桑野茂先生 春日市（福岡県） 整形

外科 「ニースの坂道」石作りの道や壁

は物質感に満ちている。そこに赤い道、



「ニースの坂道」 桑野 茂



「人生は旅」 隅坂 修身

のあとには演奏する人々、前方には黄色い大きな風か波。困難か希望か？ 今回の大震災への思いがにじむ。相当の手慣れた画家である。



「ひまわり」 坂下 昇

青い空。日向と日陰でバランスをうまくとっている。隅々まで心を配ったいい絵である。

坂下昇先生 広島県府中市 外科「ひまわり」この絵は高木實先生の「ひまわ

り」と一緒に並べられともに異彩を放つた。ひまわりは絵を描く者なら一度は挑戦したい対象である。みごとに大輪のひまわりが咲き誇っていた。

先生方には今後も銀座で毎年行われる伝統ある医家美術展に参加していただければ幸いです。

昨秋の美術展出品作と差し替えられた先生方の作品も紹介しよう。

隅坂修身先生 米子市 整形外科「旅は人生」「人生は旅」

No Problem」と書かれた旗を持ったゼウスらしき人物がロバに乗って進む。そ

木村典子先生 杉並区 内科「ポース

リン」(写真⑤)お皿が花のように咲いている。秘密



の花園、プライベートなくつろぎの場所、物質感とやさしさを表現している。木村先生

はやさしい色彩とバランス感覚にすぐれた絵をいつも描かれる。今回の絵は今ま

でと異なる新しい絵画への挑戦のようだ。

白矢健二氏 兵庫県 画家 「救い」

面白い型破りの構図である。仏の周りにかわいい動物、動物は人間に自由に振り回されている。そういう動物を見守り

「救い」 白矢 健二



たいというのが本人の意向だそう。心癒される一枚。

榎本貴夫先生 つくば市

脳神経外科 「滝シリーズ」

4点。いつも滝を描かれている。実際にその滝に行かれる先生の意気込みが出てくる。川は滝となり生きとし生けるものの命をはぐく



滝シリーズの二つ
「栗又の滝」 榎本 貴夫

む。雄大な滝を眼前にその水の生命を吸い込む先生の姿が眼に浮かぶ。臨場感あふれる絵だ。



「カモメ」 白幡 雄一

白幡雄一先生 千代田区

耳鼻咽喉科 「カモメ」 すみずみまで心を配ったいい作品である。裸婦と金属のツボの対比、人肌と金属の描きわけ。バックに描かれた絵、床の位置はうまく空間を感じさせている。物質感の表現や構図のすばらしさを示すすぐれた作品である。

山崎嘉弘先生 静岡市 内科 「パイ

オリンと花」 写真㊦ 先生独自の画法である。4点出品されたが、これが一番好きだ。色彩豊富だがまとまっている。抽象画のようであり具象画のようでもある。



る。セザンヌ的構図、見せたいものを見せて絵画として成り立たせる。落ちかけた楽譜はパイオリンによって引き留められ画面に緊張感を与えている。

斉藤懐子さん 小平市 白矢眼科スタ

ッフ 日大芸術学部油絵学科大学院卒

「君が眩しい」 全てよく描けている。その中で人物の顔が眼につく。ピエロに



なつたのは恋人か自分なのか？何か迷っているふうにも見える。人間の心の中を表すすごい絵だ。

「君が眩しい」
斎藤 懐子

板垣遥さん 小平市 白矢眼科スタッフ
フ 武蔵野美大日本画大学院卒 「包む」

構図がお

もしろい

写真①。白

を意識して

描いたそう

だ。バック

が主体を空中に浮かんでいるように見せている。繊細な深い意識の底を感じさせ



竹内奏絵さん 東大和市 白矢眼科スタッフ
武蔵野美大油絵学科卒 「風景」

本人によるとデッサンの段階ということであるが立派に作品となっている。家と木、庭の組み合わせ、なにげなく見過ごす日常を



愛情ある目で見て
いる。さらっと描かれて見

えるが、その技術力の高さがうかがえる。

書・写真にも替嘆の声

書道の掛軸を見て、「これがお医者さんの書いたものですか。すばらしい」と褒める人も何人か。

写真はプロの方が多く見えた。「もう少し下の方を削ればもっと良くなる」とか、「この情景の中で、この光の明暗はなかなか出せるものではない」とか感心していた。

二部 若い才能がんばる

第2部の演奏会のトップバッターは糖尿病内科で有名な近藤甲斐夫先生の関係者、斎藤懐&



高橋尚紀Ⅱ写真⑤の六弦ギターである。曲名は「スタート」。若い力
は会場の熱気を一気に高めた。早稲田の学生さん、彼

らもこの日本の危機をなんとかしたいと自ら申し出てきたのである。そんな心意気が多くの人々に伝わった。

馬場絵里菜ポーカル松村拓海フルート「ハサミと額縁」馬場絵里菜作曲作詞、独特の歌い回し、彼女しか出せないすばらしい声。多くの人がその才能に驚いたと思われる。絵理菜さんのお父さんは小

平薬劑師会の会長である。医家芸術クラブに所属し自らの薬局の2階にコンサート



トギヤフリ
ーを持たれ
日々街の人
々を楽しま
せている。
温厚なその
笑顔は、小
平薬劑師会
を支えてい
る。

その後白矢、山之内照雄、澄川和美、奥村秀と続く。私が歌う前に奥村秀先生が「野球で言えば2軍チームの登場と言つてね。草野球チームとかなんとか……」なにしろ我々はカラオケがないと歌えない、観客を前にして歌ったことがないのである。しかし今ではすべて日本医家芸術クラブの会員である。山之内先生「乗りかかった船だから」と低い声で笑顔。私は「あなたのすべてを」を歌う。この

歌は女子医大の眼科教授堀貞夫（私の恩師は堀先生と元琉球大学教授の長滝重智である。糖尿病性網膜症や角膜について教えていただいたこのお二人にはいつも感謝している）が、昔よく歌っていた自然に覚えてしまった曲である。



私は銀髪の長いカツラに大きなサンングラスⅡ写真④、照れ隠しで登場。まず大きな声で「皆様こんにちは」最初に大きな声を出すとあとはスムーズになる。「今日はこんな地味な格好で出てまいります。今日日本は大変なことになっています。しかし皆で沈んでしまつては日本がだめ

になる。今までお世話になったお店に（〇〇〇）を出しましょう」

大きな笑い声の中、身振り手振りで大声を出した。何がわからないうちに終わり頭を深々と下げ、さつさと階段に向かい顔を隠してしまつた。アンコール拍手があつたそうだが、緊張していたためかまかつた耳に入つてこなかつた。萩野先生が「白矢先生の歌はずいでしたよう」followしてくれたと後で知つた。

澄川和美先生 小平市 耳鼻咽喉科
「千曲川」 猪俣公章作曲 山洋子作詞。



真面目に真面目に歌われる
先生の姿Ⅱ写
真⑤Ⅱに感動
いつも仲良く
ご一緒させて
いただいでい
るが、この時
心から先生に
感謝した。最

近ちよつと最近体調を崩されていたのに
出演してくださったのである。

山之内照雄先生 小平市 整形外科

「It's been a long long time」

低音の魅力2曲に会場からすばらしさ
のため息が聞こえた。先生は多くの小平



ボリュームたっぷり
の山之内先生

市民に愛され小平に山之内ありと歌われ
ている。その風貌と髭は何物をも圧倒、
しかしそのやさしい笑顔に引き込まれる
人は多い。

奥村秀先生 小平市 眼科 What a

wonderful world by Louis Armstrong

先生は小平医師会長である。小平医師
会のこれからの役割を「僕たち医師は被
災地の方々が来られたら全力でお迎えす
る用意をしている」ということをわかり

やすく説明。「小平医師会では被災された
方々に対して市役所の職員の方々と連携
してともに支えよう。小林市長や永田市
会議長も真剣にとりこんでいる、小平市
民の生活にも気を配っている」また応急
診療所や看護ステーションについても言
及された。アメリカで過ごされた経験が
あるせいかな、その英語はネイティブ。や
さしい笑顔は医師としての模範となるも



奥村先生はサッチモバりにみごとに歌い上げました

のであった。リズムカルに身体を揺らし
ながら歌う。

飯塚崇志先生 横浜市 皮膚科「グリ

ーンズスリーブス、私のお気に入り」



さすが音大出、飯塚先生のクラリネット

先生は音大卒業後医師になられたそう
である。萩野先生率いる「はぐどはんと」
とともにクラリネット演奏。この時初めて
クラリネットの虜になった人々も多いと

思う。足でリズムを取りながら聞き惚れる。曲もすばらしいがクラリネットを吹く姿、ピアノを弾く姿がまた魅力的だ。私も身体がリズムに乗って動いていた。

ロベルト デイ カンデイドさん（藤原歌劇団団員）が友情出演 「誰も寝てはならぬ、イパネマの娘」

誰も寝てはならぬは、インターネット



「はぐどばん」の皆さん、熱演ありがとうございました



素晴らしい声量「だれも眠らず」傾聴しました

で調べると次のような説明があった。「イタリアの作曲家プッチーニの最後の作品で、未完成のため弟子のアルファーノが完成させたものです。この歌劇は、中国を舞台に、絶世の美女ながら氷のように冷たい王女と、放浪を続ける王子カラフの恋物語です。カラフは一目見た王女トウーランドットに恋をしますが、姫は王子との結婚を拒否します。そこで王子は「夜明けまでに私の名前が分かったなら喜んで命を捧げよう」と姫に謎を出します。そして高らかに「誰も寝てはならぬ あなたもそうだ 王女様」と歌い始め、夜明けまでに自分は絶対に賭けに勝ち、王女の愛を手に入れるという内容

の歌になっています。2006年、トリノ五輪で女子フィギュア・スケートの荒川静香選手がこの曲を使い、見事に金メダルを獲得したことは記憶に新しいことと思います。まさに、荒川選手が氷の姫トウーランドットそのもののように見えたことと思います」歌い終えた後、多くの人に親しまれている「イパネマの娘」会場はなごやかな雰囲気でも楽しいものであった。萩野先生が100円でも200円でもご寄付をお願いしますと一言。後で募金箱を調べた若い友人が「先生とんでもない額のお金が入っています」と驚いた声。このお金は近いうちに義援金として送ることになるでしょう。

会場終演後医家芸術関係者のみ残る。

木下優奈、玉木英里子さんおよびHP担当の鈴木さんを紹介。また小平の会員である山之内、澄川、奥村先生を紹介。小平ではその他今回出演できなかったが本格派歌手である古坂明弘先生（四谷のアリンコでリサイタル、お姉さんは有名な

美人シャンソン歌手)や写真部に入つてくれた中野先生などの会員がいる。それに現在リハビリ中の絵画部・写真部の清水五郎先生がいらつしやる。私自身も小平の洋楽部部長松木先生に誘われてこの会に入った。

再生委員を増やしました

鈴木(啓)、竹腰、萩野3氏

会員同士の挨拶が終わる、再生委員を増やす話となった。絵画部の鈴木啓之先生、写真部の竹腰昌明先生、洋楽部の萩野先生が加わり6人態勢となる。日本医師会に昔から存在して50年以上たつこのクラブが楽しく明るい世界を夢見て医学と芸術の世界を極めていこうと結束したのである。

総会は6月19日銀座で、再生委員会はコーラスラインで6月1日と決まった。このクラブの機関誌は創刊号から残されている。我々の先輩が日本の医学および芸術について記している。残された機関

誌は非常に貴重なもので、じっくり読むと日本の医学の歴史が浮かびあがってくる。このクラブを愛し、医師という職業を持ちながら芸術運動を広めていった我々の諸先輩。この長い歴史はすべて文集として残されている。

私の知っている先生について述べよう。お亡くなりになった大村光先生は銀座の画廊で“守り神”のように毎日会場に座つて人々を温かく迎えていた。玉井良男先生もすばらしい人だった。このクラブを頼むよと言われた優しい顔を忘れられない。萩野先生のお父さん故昭三先生はユーモアたっぷり、東北弁で歌曲を歌つたりして、エンターテナーのなんなるかをこ存じであった。このクラブを愛してやまない会員、また今はすでにお亡くなりになられた立派な先生方のためにも医学と芸術の間を取り持つこのクラブは元気でなければならぬ。

日本を襲つた悲劇に対して我々はともに立ち上がらなければならぬ。皆々様

にもお願いします。我々の先輩が残してくださつた大きな宝物を後世に伝えていく、お互いに協力してこのクラブを支えていきましょう。

聴衆と一体の演奏会

萩野仁志

演奏会当日は前日と対称的な寒い日でお客様の出足を心配しながら午前中のリハーサルを行つていましたが、蓋を開けてびっくり！ 100席以上用意した席も満席となる盛況ぶりでした。医家芸術クラブの会員の努力と、地元で顔の広い白矢勝一先生を始めとした小平医師会から出演された先生方がファンを数多く連れて来られていた様子でした。

会に先立ち、初芝澄雄先生から開会のお言葉を頂きました。お話の中で先生のお言メラのご功績もご紹介頂きました。

第一部は旧来から行つて来たような正統派クラシックの演奏が行われ、各演奏

者がしつかりとした演奏レベルを保つて充実した時間でした。松木耀子先生は直前にお腰を傷められて座った状態でお歌いになっておりましたが、マイクを上手にお使いになってしつかりと歌唱されていました。小川昭子先生たちのコーラスで会場が和やかな雰囲気になったところで、一部の最後には木下優奈さんが生まれ故郷である韓国のアリランの舞いを披露して下さいました。「別れた恋人を思う気持ち」が込められたアリランが被災した人達の気持ちと重なって感じられ感動の舞いでした。

第二部の会に先立ち太田怜先生からご挨拶を頂きました。

演奏は嘉藤駿さんと高橋尚巳さんの六弦ギター演奏から始まりましたが大学生の若いパワーが会場を魅了しました。馬場絵里奈さんはフルート奏者を連れて普段ライブ活動をしている実力を披露して下さいました。若い二組の演奏には観客から拍手喝采の歓迎を受けました。我々

熟年層にとつても若いパワーはとても新鮮で会にスパイスを頂きました。

二部の後半のプログラムは医家芸術クラブ会員として初の試みでした。私の率いる「はぐどばん」のバックバンドにより白矢勝一先生を先頭に小平医師会の諸先生方が歌謡曲やジャズスタンダードを歌いました。皆さん生のバンドをバックに生き生きと歌われ、会場に聴きに来て下さった沢山の聴衆の方ととても良い交流が出来ました。特に白矢勝一先生は金髪の変装もなさって、派手なパフォーマンスと共に聴衆の度肝を抜く迫力のある声で会を盛り上げて下さいました。

最後は医家芸術クラブのオーケストラ指揮もしてきた音大出身の飯塚崇志先生が、はぐどばんのバックにより、クラリネット演奏を披露しフィニッシュして下さいました。プロの演奏技術で味のあるクラリネットは観客を魅了しました。

第三部は私の友人である藤原歌劇団員のロベルト・デイ・カンデイドさんに

歌って頂きました。ブラジルの曲「カリニョーン」は日本人に馴染みの少ない曲ですがブラジル人なら誰でも知っている曲で、ラテンのリズムに乗って素晴らしい歌唱でした。最後にプッチーニのトゥーランドットより「誰も寝てはならぬNessun dorma」を熱唱して下さいました。荒川静香がイナバウワーを氷上で舞った時の曲ですから、誰もが知っている名曲で、歌い終わった後は「ブラボー」の連呼で大盛況のうちに会は終了しました。

今回は私のバンド「はぐどばん」のメンバーであるベーシストの多田文信さんとドラマーの有吉拓君のプロミュージシャン二人が最高のパフォーマンスを提供してくださり皆さんへのバックアップが出来たことが会全体の音楽レベルの向上につながり、楽しい会となるお手伝いが出来たのではないかと思います。

以前から医家芸術ではクラシック音楽の出演者がプロのピアノ奏者に伴奏をお

願いしたり歌ではデュエットの共演者を呼んで演奏のレベルアップを図って来ました。プロの方にお手伝い頂くことに賛否両論あると思いますが、観客に聴きに来て頂いて「聴くに耐える」演奏会を催すのは主催者として最低限の責任と思っておりますので、我々素人がプロの方にお手伝い頂きながら演奏レベルを維持することはクラシックでもその他のジャンルでも同様に大事なことだと思えました。今回は白矢勝一先生が「とにかく聴きに来てくれる人が楽しめる会にしよう」と号令をかけてくださり、その趣旨に沿ってクラブ会員皆が力を合わせて準備し、本番では聴衆と一体となって楽しめる会となった結果が大成功へとつながったのだなと思います。裏方を努められた事務局、お手伝いくださった関係者ら皆さまに感謝します。

また、東北関東大震災のチャリティーイベントとして開催された会に共感して義援金にご協力頂いた聴衆の方達にも、

深く感謝の意を表したいと思います。

(洋楽部・再生委員)

仰天“プロの技”

安井 廣迪

会場には遅れて着いた。早速ワインをいただきながら壁面に展示された絵画や写真を見ていると、コンサート第二部が始まった。壁のこちら側にいるので演奏者は見えない。ギターの演奏のあと、女性のボーカルが聞こえてくる。少し矢野頭子のような声で、実に軽妙に歌っている。異次元空間に飛び込んだようだ。

少し聴いているとバックでジャズのトリオが演奏しているのが分かる。どんな人たちだろうと客席に行ってみた。ボーカルの馬場絵里奈さん、フルートの村松拓海さん、それにジャズバンド「はぐどばん」が演奏していた。

医家芸術の音楽部はアマチュアの集団

である。だから私は、ここで演奏している人たちは、その演奏の素晴らしさゆえに、全員プロの人たちだと思った。とりわけ「はぐどばん」のリーダー・荻野仁志さんは驚異的なテクニクでピアノを弾くと同時に、絶妙のトークでステージをリードし、やはりプロの人は違っなあ、と思ったのであった。

続いて白矢先生（医家芸術クラブ再生委員会の親玉）の歌だったので、楽しみに待っていたら、ものすごい「かつら」をつけた先生が登場して度肝を抜かれた。ここはぜひ写真で紹介してほしい。身振り手振りも素晴らしく（歌はどうしてもよい、という訳ではないが、時々調子はずししながら朗々と歌う白矢先生に、私は100点満点をつけた。

その後、小平医師会の重鎮の方々の、NHKのど自慢のような歌が披露され、飯塚先生の素晴らしいクラリネットの演奏のあと、藤原歌劇団所属のロベルトさんのテノールとなった。プロの声とはこ

のようなものなのか。プッチーニの『ト
ウランドット』から「誰も寝てはなら
ぬ」が歌われ、終わってから拍手が鳴り
止まなかったのは当然だ。私は、CDや
テレビ以外でこの歌を聴いたのは初めて
で、いたく感動した。

最後に、ピアノの荻野さんが挨拶した。
このとき、荻野さんが、実は荻野先生
という「プロ」のお医者さんで、ピアノ
のほうが趣味の領域にあるということを知
って仰天した。それにしても、このト
リオの演奏は素晴らしかった。

私は、白矢先生に頼んで、また近いう
ちに、このトリオを中心にコンサートを開
いてもらおうとひそかに思っている。

(文芸部・再生委員)

多彩なマグノリア属のよう

大震災後の医芸コンサート

津谷 喜一郎

通りの脇の低い木に白い花が咲いてい
る。なんの花だろう。辛夷にしては花が

小さい。三月十一日の大地震後、学会や
シンポジウムなどが軒並み中止や延期と
なり時間にゆとりが生じた。週末もゆつ
たり過ごせる。こうした木々に関心がい
くのもそのせいかもしれない。

四月三日の日曜の午前中は、上野の国
立科学博物館で開催されている「歴史で
みる・日本の医師のつくり方」日本にお
ける近代医学教育の夜明けから現代まで
」を見た。上野の山の桜はまだ早いが、
結構な人出だ。四月一日に再開した上野
動物園に、何年かぶりに戻ってきた。パン
ダがいるせいだろうか。駐車場に入るの
にだいぶ待たされた。

四月八日〜十日に予定されていた日本
医学会総会は、東京ビッグサイト会場で
の講演会・博覧会が中止となった。学術
講演などはDVDを後日配布、また各種
展示は一部インターネットで開催される
との事である。国立科学博物館の近代医
学教育史の展示は大地震後、三月二十一
日まで臨時休業であったが、動物園と

同じく四月一日から再開していた。

展示はなかなか面白い。特にGHQが
戦後の医学教育改革のために出した指令
書は大変興味深いものである。外国語と
して英語を学ぶこと、博士号は臨床医学
分野ではなく特定の専門領域で授与すべ
きこと、など。この文書(次頁・囲み記
事参照)により明治以降の日本の医学教
育が大改革をなしたことが明確にわかる。
博士号は「臨床医学分野ではなく」(not
be given in a clinical field of medicine)
というのは、臨床医学全般をそれなりに
では不可、ぐらゐの意味であろう。

上野から小平の白矢アトススペースで
の午後二時からの演奏会に車で向かった。
久しぶりの中央高速道路だ。

結構時間がかかり、到着したときには
残念ながら一部のクラシックの部は終わ
っており、二部の途中からのオーディエ
ンスとなった。

馬場絵里奈先生の自作曲のボーカル

戦後の医学教育改革に関するGHQ/SCAPの指令

1945 (昭和 20) 年、日本を占領した連合軍司令部 (GHQ/SCAP) は、日本の医学教育について委員会を設置し、医学教育の方針を決定した。それは、まず戦時中に出来た医学専門学校をA・Bのランクに分け、Bランクを廃止すること、すべての医学校の修学年限、入学、卒業を統一すること、英語を必須とすること、1946 (昭和 21) 年から免許取得前にインターンを実施し、医師国家試験を実施することであった。第 1 回医師国家試験は 1946 (昭和 21) 年 11 月に行われたが、志願者 270 名、合格者 137 名 (51%) であった。

(歴史でみる・日本の医師のつくり方 [図録]。第 28 回日本医学会総会発行、2011 年から)

意外に音量がある。頭髮に気がとられて、大きな手振りか歌詞にマッチしたも
のになつてい
るのに気がつく
のがいささか遅
れた。

澄川和美先生
は、千曲川を熱

唱された。会場では各種ワインが提供されてお
り、わたしは甘い白ワインを飲んで

いた。この曲は別のお酒がよさそうである
と途中で気がついたが、会場は満員で移動が
ままならず、そのまま白ワインで楽しむこと
になった。

山之内照雄先生の二曲は、当日最も印象
に残った。「お久しぶり」というタイト
ルの解説をされたが、どうもピンとこ
ない。やはり、別のお酒が必要かと思
った。

ところが「Kiss me once, kiss me twice

and kiss me once again. It been a long, long time...」とスローテンポで歌われると懐かしいよく聴く曲だ。誰が歌っていたのであろう。中学生の頃、十歳以上年上の義兄の家でLPレコードをコロンのピアの幅広のステレオで聴いた覚えがある。一世代上の曲だ。山之内先生はきつとロマンチックな思い出がこの曲にあるのであろう。二曲目は「ハッシュバイ」だ。母校の東京医科歯科大学の恩師の臨床薬理学の佐久間昭先生の持ち歌の一つだ。懐かしい。この曲を歌う人が他にも日本にいたのだ。

奥村秀先生は、唄の前の語りが堂に
いっている。「What a wonderful world」は、
ルイ・アームストロングそっくりに歌う
人が多いが、奥村先生はすこし違った。ピ
ッチで、軽いのりで歌われた。新解釈だ。
あとで小平市医師会会長をされていると聞
き、むべなるかなの感

飯塚崇志先生のクラリネットは素人の
域を脱している。「グリーンスリーブス」

「ハサミと額縁」は、世の中のわずらわ
しさから吹っ切れた(らしい)性格がで
ており、ドライで心地よい。松村拓海氏
のフルートは、学生時代にモダン・ジャ
ズを知り始めた頃に聴いた、ビル・エバ
ンスのピアノと、ジェレミー・スタイグ
のフルートによる「What's New」を想
い起こさせてくれた。

白矢勝一先生は、銀髪の長髪で登場し
た。日本の頭髮医学も進化したものだと、
一瞬、感心した。

はカラフルな色が見えるような演奏だ。「私のお気に入り」は、大地震後、人々がなにか原点に戻るような心性を示しているときにピッタリする曲であった。おもわず一緒に小さくハミングしてしまっ

た。
社会心理学によれば、災害の被災者の心理的経過は「茫然」「連帯」「不満」「再建」と推移するとの由。大地震後二十三日目のこの催しは、日本医学会の関連行事として東京ビッグサイトで開催される予定の日本医家芸術クラブの諸活動がすべて中止となり、日本医家芸術クラブ再生委員会委員長の白矢勝一先生の発案と周到な準備で、絵画展、写真展、書道展とともに開催されたものである。

日本で多くのコンサートが中止になった。一方、音楽によって被災者に「安らぎの調べを届ける」と活動するものもいる。チャリティーを目的に開催するものもある。いずれに対してもいささかの違

和感を持っていたが、今回の催しは、そのような違和感をまったく感じさせないものだった。先の心理的経過のうちの「連帯」は「ユートピア期」や「ハネムーン期」とも称されることである。催しはTPOがきつとうまく合っていたのだろう。

研究室の中国人女性研究者によれば、白い花はMagnoliaとのことだ。厚朴や辛夷から泰山木まで広く含む属名だ。今回のコンサートは多彩な種を含むマグノリア属であった。(文芸・再生委員)

洋楽部を担う萩野先生

高橋 妙子

萩野先生は本当にプロですね。洋楽部は年寄りが多いので、いずれは萩野氏が洋楽部をひっぱってゆく事になるだろうと思います。小平医師会の皆さん、声がよくよいのに驚きました。伴奏に慣れていらつしやらないのか、少し合わないところもありました。腰を痛められた松木先生

は椅子に座られて歌われ、大変でしたね。責任感の強いリーダーとして出演なさったのが偉いですね。

美術、写真、書道は分かりませんので、触れませんが、白矢先生が無償で会場をお貸しくださって、感謝です。皆さまに喜んでいただけ、盛り上がってよかったです。(邦楽部部长・洋楽部)

多士済々の写真部

竹腰 昌明

日本医学会総会ソシアルイベントは東日本大震災のために急遽中止となり、「東日本大震災」支援チャリティーとして、4月3日シラヤアートスペースにおいて音楽会と合同で開催することになった。写真展は15名で27点の出品であった。

昨年10月に開催した「医家写真展」の写真を移行した方が多く、新たに出品した方もいる。大武省二先生のように花を毎年題材とする方、三上英夫先生のように毎年田んぼアートを主題とされる方、

高橋俊一先生のように毎年山だけを主題にされる方、岩瀬 光先生のように光と影を主題にされる方と多士済々である。



最後に場所を提供して戴いた白矢勝一先生に深謝申し上げる次第である。

(写真部部長)

各部門で堪能できた一日

岩瀬 光

日本医学祭総会協賛イベントが、東日本大震災で中止となり、3日、小平白矢アーツスペースで開催されました。被災者の皆様、犠牲になられた方には謹んで哀悼の意を申し上げます。

まず、演奏会が震災チャリティーとして行われました。高野先生のフルート、松木先生の独唱、馬場先生の作詞作曲、飯塚先生のクラリネットなど見事なものでした。特に伴奏等をつとめられた荻野先生のピアノトリオは見事でした。また事務局の木下優奈さんのアリランの舞も見事なものでした。

美術展は、力作がそろい大きな感動を呼びました。

書道展も大西先生、小口先生、飯田先生を始め傑作が目白押しで見事でした。

写真展は、竹腰先生の黄龍、海の夕景を始め、大森先生のユブシの咲く頃、関

口先生の夕陽、大武省三先生のみごとな花、木村典子先生のドイツの祭り、三上先生の田んぼアートの、新井先生のメコンの人々、大武秋筆先生のトルコ軍楽隊、高橋先生の山の写真、鷹橋先生の光の芸術、皆見事なものでした。なお、小生の『人生の坂道』、『棚田のシルエット』もなかなかのものでした。

医学祭総会は中止となりましたが、多くの参加者に恵まれ、演奏、写真、美術、書道を堪能できた一日で、有意義であったと思います。(写真部副部長)

音と色彩のコラボ

鈴木啓之

今年(平成23年)の第59回日本医家美術展は、3月11日に東北・関東地方を襲った東日本大震災により予定のスケジュールは全面的に変更となりました。当初は4月8日から10日まで日本医学学会総会の会場である国際フォーラム(東京)

で開催される予定でした。有楽町駅から徒歩1分という地の利のよさに加えて、展示スペースも明るく広い場所ので、美術部長の白矢先生以下、美術部担当者や医家芸術クラブ事務局の方々も大いに張り切っておりました。ところが突如東北地方を中心に襲ったマグニチュード9の大地震とそれに続く大津波により、日本医学会総会は急遽中止となり、それに付帯する美術展もとり止めになりました。

そこで第59回日本医家美術展は、シラヤ・アーツスペースに移しての開催となりました。この会場は美術部長の白矢勝一先生が設立し運営する施設です。前年開催された第58回日本医家美術展に出品された作品が、そっくりそのまま今回の展示のため白矢アーツスペースに保管されていたのが幸いしました。そして、4月3日には、東日本大震災救援のチャリティーイベントとして音楽部の演奏会とコラボレーションする形で行われました。

当日、瀟洒な建物の1階には書道作品やサイズの大きな絵画作品が並べられ、階段をのぼった2階が演奏会場になります。その白い壁面には50点をこす絵画、写真が展示されています。日本画、油彩画、水彩画、鉛筆画などの技法を駆使した会員の力作がならびます。モチーフも山、海、街の風景、人物、静物、花や樹



1階には書と並んで絵画の大作
れました。

などの自然、心象風景など多彩です。演奏会開催までのあいだを、みなさん絵画、写真、書道などの作品を楽しんでおら

演奏会に先立ち、全員起立して黙とうを捧げました。演奏会は一部、二部に分かれ、予定時間を1時間も超過して成功裡に終演となりました(演奏会、写真、書道などの詳細はそれぞれの担当者の記事をお読みください)。

絵画に囲まれた空間に音楽が流れ、美しい歌声が響きますと、絵画と音楽とが相呼応して、まさに音と色彩のコラボレーションです。さながらヨーロッパの宮殿で催された音楽会のような、ゴージャスな雰囲気でした。この日集まった義援金は30万円を超し、すでに被災地に送られています。

絵画部では今秋も医家美術展を開きたいという声が高まり、10月14日から16日まで銀座の画廊「悠玄」で開催される予定となりました。会員諸氏がふるってご出品くださるよう期待しております。

(美術部副部長)